

地図への想い

インサイダー編集長
高野 孟



1. インテリジェンス

よくできた地図帳は、インテリジェンスを鍛えるのに役に立つ。

日本語で「あいつはインテリだ」と言うと、知識・教養があつて頭がいい人、というようなニュアンスだが、インテリジェンスの英語本来の意味は、知識・教養というよりむしろ知恵に近い。情報、諜報と訳す場合もあって、たとえばアメリカのCIAはセントラル・インテリジェンス・エージェンシーすなわち中央情報局である。ところが英語にはインフォメーションという言葉があつて、これも情報と訳されるのでまぎらわしいが、インテリジェンスとインフォメーションは別物で、CIAをセントラル・インフォメーション・エージェンシーとは絶対に言わない。逆に駅の案内所はインフォメーション・センターで、このときにはインテリジェンスは使えない。

日本語では同じ情報でも、インフォメーションはすでに在るもの、起きたことについての事実情報である。第1次情報と言ってもいい。「情報収集」という場合の情報はこれで、できるだけたくさん集めることが大事である。それに対してインテリジェンスは、たくさんのインフォメーションを吟味して、取捨選択し、並べ替えたり付き合せたりして相互関係を探り、隠された問題を炙り出すなど、いろいろな操作・処理を加えながらしだいに煮つめていって、最後に「こうだ！」と結論を取り出すそのプロセスと結果のことを言う。

たとえて言えば、インフォメーションは収穫されたブドウが籠に入って山積みになっている状態である。そこから粒を選んでワインを作り、さらにそれを蒸留して琥珀色のエッセンスを一滴一滴溜めるとブランデーになるが、それがインテリジェンスである。CIAの本部は、

世界中に散らばった支局やエージェントから集まってくる1日に何万件ものインフォメーションからエッセンスだけを取り出してレターパッド1枚程度に凝縮して、毎朝一番に、大統領のデスクに届けるという。アメリカのトップとして、また世界の指導者として、日々いくつものことを決断しながら前に進まなければならない大統領の仕事は、そのようなインテリジェンスの機能なくしては果たすことができない。このことは、会社の社長だろうと労働組合の委員長だろうとNPOのリーダーだろうとジャーナリストだろうと学者だろうと同じことで、およそ責任ある仕事をやり遂げて人から評価を得るには、インフォメーションの量をたくさん持っているだけではダメで、インテリジェンスの質の高さを達成しなくてはならない。

私が思うに、日本の学校教育ではまだまだインフォメーションすなわち知識の詰め込みに傾きすぎていて、インテリジェンスすなわち知恵を鍛えることがあまり重視されていないのではないだろうか。欧米では早くから子どもたちにインテリジェンスの訓練を課す。人から聞いた話では、イギリスの小学校では、たとえば5年生の夏休みにフランスのアルザス地方にホームステイに行くとなると、その1年前からその行き先がどういうところで、そこへ行って自分は何をしたいか、何を見たいか、それぞれ自分のテーマを見つけろという指導が行われる。子どもらは、図書館に行って百科事典や地図帳をめくることから始めて、いくつか本を読んだりして知識を蓄えていって、その中でたとえば、何とかの森の妖精伝説に興味を持ったとすれば、それをさらに詳しく調べて、「私は何とかの森で妖精に会いたい！」というテーマに行き着いていく。そのように、インフォメーションの海を自力で泳ぎ渡って、何らかの決断や行動選択に必要な結論的な情報を到達するのがインテリジェンスで、本当はそういう能力を備えた人をインテリと呼ばなければいけない。

さて、前置きが長くなつたが、地図はそのような意味でのインテリジェンスを鍛えていくための不可欠の道具の一つである。たとえば、イスラエルとパレスチナの紛争が激化しているというニュースを、ただテレビで聴いているだけでは「どこか遠いところの話」として通り過ぎていってしまうが、そのときにちょっと地図帳を持ち



帝国書院地図帳より

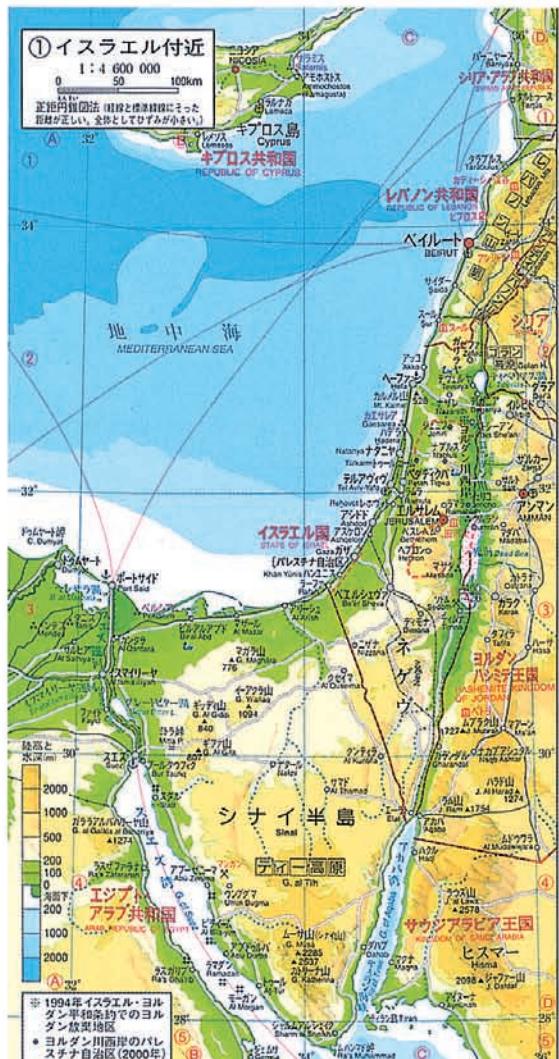
出して「中央アジア」のページを開いて、イスラエル／パレスチナの位置を確かめるだけで、だいぶ現実感が湧いてくる。北から東にかけてレバノン、シリア、ヨルダンに接し、南西にエジプトがあり、西はもう地中海に面しているその位置取りを見て、「あ、そうか、パレスチナはアジアの西の端なのだ」と気づくようならたいしたものである。それで初めて、アラファト・パレスチナ自治政府議長が常々、「一番尊敬する人は東郷元帥だ。初めて白人＝ロシア人を打ち破ったアジア人だからだ」と言っている意味が理解されるだろう。そして、パレスチナ人がアジアの東の端の日本を「同じアジア」と捉えていながら、日本人がパレスチナを必ずしもそう認識していないこのギャップは、どうして生じたのだろうかーと

考えると、もうそこでインテリジェンスの領域に踏み込み始めているのである。

「中央アジア」の地図では全体的な位置関係しかわからないが、地図帳にはイスラエル付近の部分図、エルサレム市とその旧市街の拡大図などが付いており、このような図をみるとことで、しだいにこの問題の奥にまで引き込まれていく。そこで「あれ、待てよ。ユダヤ教とキリスト教はどういう関係だったかな」と疑問が湧いたとすると、同じく地図帳には普通ついている宗教の分布図で知識を確かめることができる。ここまで来ると、もっと知りたくなって、ウェブサイト検索して調べたり、パレスチナ問題や世界の難民問題の入門書を買ってきたりしているうちに、なぜか「死海」に興味が湧いて、「是非

一度、旅してみよう」ということになるかもしれないし、あるいは日本にもたくさんあるパレスチナ支援のNPOが主催する写真展に足を運ぼうという気になるかもしれない。

こうして、たまたま耳にしたニュースが、地図帳を媒介にすると、イギリスの小学生が迷ったのと同じプロセスを通って、一気に広大な知的空間の中にわれわれを投げ込んでくれる。それがインテリジェンスであり、詰め込んだ知識はたいていは役立たないけれども、こういう知的方法論を身に付けておけば、どんな仕事でも趣味でも応用が利いて、人生を何倍も楽しく過ごすことができるはずである。



帝国書院地図帳より

2. イマジネーション

インテリジェンスの重要な武器は想像力（イマジネーション）である。空想力（ファンタジー）は、その英語が幻覚とか白昼夢とも訳されることがあるように、現実を離れてどこまでも飛んでいってしまうが、想像力は、あくまで現実に即しながら、しかしその見えない部分まで探し出そうとする好奇心に突き動かされて、「もしかしたらこういう裏があるのではないか」と仮説を立てて、常識を疑い、推論を積み重ね、それからまたインフォメーションを別の角度から吟味し組み立て直したりしながら、誰も到達しなかったユニークな結論に行き着くかもしれないような、知的なたくましさである。

この想像力の訓練にも地図は欠かせない。拙著『最新・世界地図の読み方』（講談社現代新書）でも繰り返し強調していることだが、ただボーッと眺めていれば平板なだけの地図も、そこに盛られている驚くべき豊富な情報を読み込みつつ、少しの想像力を働かせれば、そこで展開してきた何千年の歴史、民族や宗教の葛藤、暮らす人々の喜びや怒りといったものが活き活きと浮かび上がってくる。

想像力が大事なのは、視点の自由な移動を可能にすることである。一例を挙げれば、講談社「日本の歴史」シリーズの第0巻『“日本”とは何か』で、編者の網野善彦氏は巻頭に、ユーラシア大陸の側から見た日本列島の地図を掲げ「“日本海”は大きな“内海”だった」というタイトルを付けた。南西が上に来て日本列島が逆さまになっているその地図は、日本とは何かを考える前提として、われわれの頭脳に染みついている北が上になった日本地図の常識を転覆するよう強制する。なるほどチンギス・カンが日本を攻めようと思ったときには、きっと日本はこのように映っていたのかもしれない、と想像するところから、今までとは違った日本像が湧いてくるのである。

このように、他者の視点から自分を見るというのは、狭い意味の地理・歴史の学習を遙かに超えて大事な精神の作用である。たとえば、日本の総理大臣が8月15日に靖国神社に公式参拝することは、日本の側から見れば国のために殉じた戦没者を弔うごく当たり前の行為であつ

たとしても、侵略の被害を受けてまだその傷も癒えていないアジアの人々から見れば、そこに祭つてあるA級戦犯の戦争指導を含めて過去の戦争全体を日本の総理が肯定しているのではないかという疑いを持つ。「そうではない」と口で説明すれば直ちに了解されることではなくて、どう説明されようとも理屈ではなく彼らがそう感じてしまうというのは疑いのない現実であって、それを無視したり非難したりしては近隣諸国の人々との付き合いはうまくいかない。彼らの言い分が正しいと認めてそれに合わせるというのではなく、彼らはそう感じているという現実を踏まえて、そこで国同士、個人同士の関係をどう築いていくかという発想に立たなければ解決はない。

これは日本社会の内部での人と人との付き合いでも同じことで、自分ではいいと思っていることが、他人の目にはそうは映らないことが多い。そのときに「自分は正しい」と突っ張るばかりでは世の中が成り立たないので、一度、他人の立場に立ってそちらから自分を眺めて点検することが必要で、そうすると自分では今まで気がつかなかった問題を発見したりもする。国際社会でも個々人の関係でも、そのようにお互いに想像力を働かせて相手の立場から自分を見て理非を見極めるというのが付き合いということであり、それがごくしなやかに自然にできるかどうかはインテリの条件の一つである。今の子どもたちにこういう訓練ができるれば、くだらない事故や陰惨な事件などもだいぶ減るのではないかだろうか。それを「他者への思いやり」という心構えの問題として説くよりも、社会に出て、あるいは世界の中で、これから生きていくうえで不可欠の知の技法として身に付けさせることが必要だと思う。

3. ビジュアライズ

このように、地図を使って見えないものまで見えるようになるわけだが、逆に自分の考えや想像など頭の中にあることを“図化”（ビジュアライズ）することで自分自身を整理し、また他人に自分の考えを上手に伝えるというのも、もう一つの知の技法である。

図化の手法には、論文や報告書を作る場合に、まず断片的なアイディアやキーワードや情報を思いつくままに

1項目1枚小さなカードに書き込んで、それを机に広げて眺め渡しながら組み替えて考えをまとめていく、一昔前に流行った「KJ法」のようなやりかたもあるし、企画書などによく使われる、概念や作業の流れを図示するフローチャートもその一つである。いずれも、目に見えるようにすることで全体の中での部分の位置づけや相互の連関が明確になったり、抜け落ちている部分を発見したりしながら、構想を完成させていくのに役立つし、またそれを人に説明したり文章に書いたりする場合にも、言葉でくだくだ述べるよりも、1枚の絵として見渡せるようにしたほうが遙かによく趣旨が伝わるというメリットがある。

この訓練には地図を描くのが一番である。小学校でも「自分の家から学校までの道順を地図に描いてみましょう」といった指導が行われるが、もっと高学年でも何によらずテーマに応じて気軽に自分で地図や概念図を描くことを習慣づけるべきである。それがもっと高度になると、自分たちの暮らしている地域を、自然、環境、文化、祭り、交通、産業、商圈など分野ごとに分担して調査して皆で1枚の地図を完成させていく「地元学」の実践にもつながるだろう。地元学は、最初、仙台在住の結城登美雄＝宮城教育大学講師が「東京に行けばいいことがあるとばかり思ってきたが、田舎にも案外おもしろいことがたくさんあるぞ」ということで、村ごとにお年寄りの昔話を聞き歩くことから始めて、その地域の生態系、集落共同体の成り立ち、農作業の年間カレンダー、旬の食べ物と料理等々、「そこにどれだけ豊かな暮らしがあるか」を地図や表や写真・挿絵などを組み合わせたポスター大の表現物として作り上げていく作業を、大人も子どもも巻き込んで一つのムーブメントとして進めることをやって、それが今では全国各地に波及しつつある。

図化あるいは地図化することで、自分や自分の住んでいる地域が別のものとして見えてきて、いわば自己対象化のプロセスが始まるというのが重要なのである。

地図を知識の補助資料として使うだけではあまりにもったいない。子どもたちの知恵を鍛える道具として縦横自在に使いこなしてもらいたいと願っている。